

ロジッタ・ミッソーニ氏と森 英恵氏にみる女性起業のありかた

文教育学部教授 篠塚 英子

日本とイタリアが産んだ偉大な世界的デザイナーの対談のコーディネート、これが筆者のイタリア・シンポジウムでの役割であった。だが残念ながら共通点は引き出せたが、相違点までは描けなかった。そこで本論で当日感じた感想をベースに若干の補足を行いたい。

2人の共通点は沢山ある。洋裁が好きであったこと、家族とくに夫の協力が絶大であったこと、子どもたちの理解も高かったことなど。なによりも、2人がビジネスの世界に飛び込んだとき、イタリアも日本もまだ現在のようなグローバル化の波は押し寄せていない。だから異文化のデザイン、色彩にたいする独創性や東洋への関心が熱狂的に歓迎された。しかもまだ競争相手は現在のように多くはない。世界に先駆けて、女性デザイナーとして、日本そしてイタリア独自の文化を輸出するパイオニアの役割を2人は担ったといえる。

しかしデザイナーとして新商品の開発者であることと、それを世界中の顧客獲得に向けて経営手腕を発揮することとは別である。2人ともこの事業拡張という面では、ともに夫の経営力に依存することで成功した。だから2人を「起業家」として眺めるとすこし違和感がある。とくに、フロアからミッソーニ氏に対して、「女性従業員のための保育所はつくってあるのか？」という質問が出たときの、彼女の回答が「コストがかかるから作っていない」とあったのは、女性起業家としての期待を裏切るものであった。女性起業家には“女性の多様な就業形態”として、同僚女性への優しいまなざしを期待しているからである。

結局、2人の経験からえた私の結論は、2人とも夫と個人自営業から出発して家族と一緒にビジネス展開をし、成功できたが、その勝ち組要因は、原型が農業とおなじ自営業であったからかもしれない、というものであった。女性よ、雇われるのではなく自営業をみなおそう！